

専門家の知識を地域へ

保育にかける男たち

乳幼児展を八王子で開催

保育の世界ではとくく女性中心になりがち、そのような中で、男性ばかりで構成される「八王子保育研究会」が結成されて四年目になる。会員は、八王子市内の私立保育園の園長ら十一人、いずれも三十歳代ばかり。出生率の低下による保育園の定員割れなどの事態に直面し、保育園の存在理由が改めて問われている昨今、互いの保育園が協力して打開していくにも、市内にある私立保育園五十四の連携が必要。横のつながりがほとんどなかった中で、「若い人たちが会を作ろう」とメンバーが集まった。保育の専門的知識を地域のものに同研究会は乳幼児展を中心にエネルギッシュに活動中である。



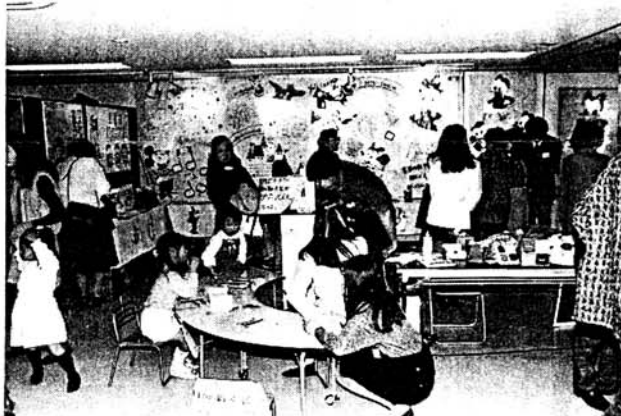
女性中心になりがちな保育の世界の中で、八王子市内の私立保育園の園長さんら、男性ばかりで作る「八王子保育研究会」(藤森平司会長)が結成されて四年目になる。女性ばかりの職場では、男の人と話す機会がなく、狭い世界では幅広い知識を得るのも難かしい。これからの保育を保育園経営の立場に立つて話したくとも、園長職の人は高齢化の傾向があり、女の合には仲間と話すような気があつたかない。研究会で知りあつた同年代の人と「若い者たちで会を作ろう」と藤森さんらは意気投合した。会員集めとして市内の保育園を一軒一軒訪

牛乳の空き箱で作った迷路で遊ぶ子どもたち

問して勧誘、まず九人の仲間が集まった。メンバーで話しをするうちに互いの保育に対する熱意がわかってきた。こうして昭和六十年十月に会は発足した。

二、三数年の現象として、全国的な入園児の減少にともなう、閉園の憂き目にあつた幼稚園、保育園も少なくない。そのなかで、激しい園児獲得作戦が展開されているのが現状だ。つまるところは子ども商品の商品化である。各々の保育園が子どもを引っぱり合うのではなく、横のむすびづきの中で保育園とは何か見直し、それを地域に問いかけた。と保育にかける男たちが立ち上がったわけである。

ただ集まって話しているだけでは何も生まれない。イベントを打ち上げて、その準備の中で本音を出し合い、困難力を高めようと、計画したのが六十二年から始めた乳幼児展だ。



自分の描いた絵がジグソーパズルになるよ

この乳幼児展は単なる保育園の宣伝というものではなく、子どもの生活そのものに関わる内容で保育園が行っている保育のノウハウを公開し、地域の人々の子育てのヒントにしてもらおうと計画。本来は子どもをより良い環境に育てるための保育園である。地域にある社会資源の一つというところを十分活用してあげたいという事を伝え、社会にとって保育とは何かを考えたいとある。この意図をの底には、より第一回の乳幼児展は「より

自分の描いた絵がジグソーパズルになるよ

賢い育児をするため」のテーマで、昭和六十一年一月に開いた。保母や栄養士などが会場で育児・栄養・健康についての相談コーナーを設けたこともあって千人もの入場者を集めた。

毎年開かれる乳幼児展の活動を昨年五月、東京都保育研究大会で発表したところ大好評であった。六月には関東ブロック研究会、十一月には渋谷区「こども城」で開かれた全国保育研究大会でも発表した。

計、検討し改良したものを集めた。

一方、現代保育用語ミニ事典も作製した。保育園の内外で使われる保育に関する言葉の解説集である。見出し語は二百近くある。「生活体験失足症」、「ノンアタッチメントディジーズ」、「高血圧児」などあるが、現代の複雑化している育児に、この情報を地域の人に理解してもらおうというもの。

昨年十二月二日から四日にかけて、八王子駅ビル八階の市民ホールで第四回の「乳幼児の世界」展が催された。キーワードの「くろ・ねる・あそぶ」の育児をする上で子どもに不可欠の三大要素のテーマのもとに展示された。そのなかでも、各保育園の保母が結成してきた「ゼロ歳児から二歳児のための手作りおもちゃ」の紹介の集大成が目玉。これは本にもなつて出版された。の。玩具は、タオルやラメの空き容器、空きなどを駆使して作ったもので、園児と一緒に遊んでその結果を集

この乳幼児展の他、この会の活動内容は豊富だ。保母を対象にした二泊二日の研修では、昨年百人近くが東京の三多摩地区から集まった。ま

た一般市民向けの講演や研修会では、手作りおもちゃの製作指導、八王子の昔話なども講師を招いて行った。さらに、若い保母のための研修ビデオを作製中であるという。

平常は月に一回、行事前には週に二回活動する。今後の展望として、「夜間保育など地域のニーズに会として応えていく」と思つたと藤森会長はいう。

乳幼児展、保育ミニ事典等の問い合わせは、省我保育園の藤森会長(〇四二六一四六一七八三五)へ。